

Title	現代ドイツ語her とhin による空間的用法と非空間的用法の中間的事例について
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化研究. 2012, 38, p. 23-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24707
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代ドイツ語 her と hin による 空間的用法と非空間的用法の中間的事例について

瀧 田 恵 巳

Über die Grenzfälle zwischen den lokalen und den nicht-lokalen Bedeutungen von *her* und *hin*

Emi TAKITA

Zusammenfassung: Die Lexeme *her* und *hin* beschreiben nicht nur lokale Richtungen, d.h. die Richtung auf den Sprechenden zu bzw. die vom Sprechenden weg auf ein bestimmtes Ziel zu. Sie werden auch für nicht-lokale Bedeutungen verwendet, wie *herrichten*, *hinkriegen*. Die Zusammensetzungen (*her-*, *hin-*) wie *herauf/hinauf* bezeichnen hauptsächlich lokale Richtungen, während sie in festen Verbindungen wie *heraufbeschwören*, *hinaufarbeiten* auch nicht lokal gebraucht werden. Bei einigen Fällen wie „Her mit dem Geld!“ ist es jedoch schwer zu erkennen, ob sie zu den lokalen oder zu den nicht-lokalen Bedeutungen gehören. In diesem Aufsatz wird der Zwischenraum zwischen den lokalen Bedeutungen und den nicht-lokalen von *her(-)* und *hin(-)* analysiert. Das Ziel liegt darin, die Zwischenstufen zwischen den lokalen und den übertragenen Bedeutungen zu erläutern.

キーワード：空間的用法と非空間的用法，空間的用法の条件，中間的事例

1. 問題提起と構成

現代ドイツ語の *her* は「話し手もしくは話し手に準じる者（以後下線部を「話者」と呼ぶ）へ向かう方向」，*hin* は「話者から離れ，ある目標へ向かう方向」という空間的意味¹を表す。また次の合成語のペアは，*her* と *hin* が対立し，かつ空間関係に関して共通の空間的方向を表す。*herab-hinab*, *herunter-hinunter* は概して下への方向を表し，*herauf-hinauf* は上への方向，*herüber-hinüber* は超える方向，*heraus-hinaus* は内なる領域から外への方向，*herein-hinein* はある領域内への方向を表す（以後これらの *her* の合成語の総称を *her-*，*hin* の合成語の総称を *hin-* とする）。これらの語彙，即ち *her(-)* (*her* と *her-* の総称) と *hin(-)* (*hin* と *hin-* の総称) は空間的意味以外でも用いられる。例えば *her* は *Komm her!* 「こっちに來い！」という文では空間的方向を表すが，*herstellen* 「生産・製造する」(例12) ではもはや空間的方向を表すとは言い難い。さらに空間的要素と非空間的要素をどちらも併せ持つ事例もまた存在する。例えば *Her damit!* 「そ

れをこちらによこせ！」という表現では、*her*は確かに話者への方向を表すが、これは単なる渡す対象の空間的な移動方向ではなく、所有権の譲渡という非空間的な方向でもある。また *herausrutschen* 「(言葉が) つい出てくる」(例8) という表現には、体内という空間が関わるが、物理的な空間移動表現というよりは、「思わず言ってしまう」という不意の発言行為を「滑り出る」空間移動にたとえたメタファーと見なされる。

このような空間的要素と非空間的要素を併せ持つ中間的事例は、どのように空間的用法と非空間的用法に関連付けられ、位置づけられるのであろうか。

本論文は、後述の空間的用法の条件によって区別される空間的用法と非空間的用法の内、空間的要素と非空間的要素を併せ持つ事例等のように典型的用法から逸脱する用法を中間的事例として、その特徴を分析することにより、空間的用法から非空間的用法へ至る段階を提示し、その要因を究明することを目的とする。なお一般的な用法を検討する観点から、末尾の引用文献 Brockhaus Wahrig (略号 BW) と Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache (略号 WdG) に記載されている *her(-)* と *hin(-)* の例文を対象とする。

その構成は次のとおりである。まず2では理論的枠組みとして、まず本論文の主要概念である空間的用法を規定する空間的用法の条件を提示し、具体例に基づいて非空間的用法との相違を説明した後(2.1)、*her* と *hin* の空間的意味にみられる4つの傾向とそれに基づく空間的用法と非空間的用法の関連付けを提示する(2.2)。2.3では、空間的用法における非空間的用法の萌芽的要素をどのように検出するかを説明する。3では中間的事例のいくつかのパターンを分析する。4ではまとめとして、非空間とみなす根本には何があるのかを考察し、空間的用法から非空間的用法へ至るプロセスを提示する。

2. 理論的枠組み

2.1 空間的用法と非空間的用法の区別：空間的用法の条件

空間的用法と非空間的用法を区別するために、本論文では空間的用法を規定する方針をとる。それは、空間的意味が空間に依存するが故に認識しやすく、それ故に多くの事例を統合・分類しうる意味として記述することができるからである。Komm *her* ! 「こっちに来い！」の *her* の空間的意味を「話者への方向」と記述することは容易で、またそれ故に共通する意味を表す例の収集も容易である。一方、*herstellen* 「生産・製造する」(例12) や *herausrutschen* 「(言葉が) つい出てくる」(例8) のように空間的用法から逸脱する *her* の意味は、抽象的であるが故に記述困難で共通点を見出すことも難しい。本論文では、次の「空間的用法の条件」と、さらに空間と方向を詳細に規定した「空間的用法の条件(詳細)」を満たす用法を、空間的用法とする。²

[空間的用法の条件]

表現される事態の示す方向は、知覚可能とみなされる空間に属する。

[空間的用法の条件 (詳細)]

表現される事態が示す〈起点 Ausgangspunkt〉から〈通過領域 Weg〉を経て〈目標 Ziel〉へ向かうプロセス全体またはその一部のベクトルは、(現実の世界であれ、想像上の世界であれ、) 全ての現実的知覚に先立って既に存在すると認識される (が故に知覚可能とみなされる) 三次元空間に属する。

この規定により、次の (1) のような典型的な移動表現の他、例 (2)~(7) も、空間的用法と見なされる。(2) の煙の動きは輪郭が臃で、移動というより広がりに見えるかもしれないが、全体としては煙突の中から外へ向かうベクトルが認められ、それは既存のものとして認識される三次元空間にある。また (3) の音響の移動も、既存と認識される三次元空間における方向を聴覚に基づいて認識することができる。(4) の指差す方向、(5) の道標の指す方向、(6) の耳を澄ませる方向は、移動ではないが、起点から目標へ向かうベクトルであり、知覚以前に既にそこにあると認識される三次元空間に認められる。(7) の道程のような空間の広がりを表す表現にもまた、ある位置から見ると谷へ下るベクトルを見いだすことができる。

一方、例 (8)~(10) のような事例は、三次元空間において起こる出来事とはいえ、ベクトルという要素を満たさないため、本論文では空間的用法から逸脱した非空間的用法と見なす。例 (8) の口が滑って言葉が出てくるという行為には、確かに体内というれっきとした三次元空間が関わる。しかし発言行為で発せられる言葉は、不変の存在としてベクトルに従って移動するわけではない。発言行為以前は思考内容であったものが調音器官を通じて初めて音声となるのである。例 (9) と (10) は確かに知覚可能と見なされる三次元空間において認められる出来事ではあるが、色彩にかかわる表現であり、空間的なベクトルは存在しないため、空間的用法の条件を満たさない。ただし例 (11) は空間的用法となる。ここでは確かに夕刻西の空が上方から暗くなりはじめるといふ明暗が描写されているが、色彩の濃淡の移り変わりの中に一種のベクトルを見出すことができるからである。さらに例 (12) の表す生産過程はもはやベクトルではなく、また生産過程そのものをベクトルに見立てたとしても、それは知覚以前に既に存在すると認識されるが故に知覚可能と見なされる三次元空間には属さない。つまり例 (12) はベクトルのみならず、三次元空間の観点においても、空間的用法から逸脱することから、本論文では典型的な非空間的用法と見なす。

- (1) Er jagte mit seinem Motorrad den Berg *hinauf*. (BW:562)

彼はオートバイをとばして山を上がっていった。

- (2) Aus dem Schornstein kommt schwarzer Rauch *heraus*. (WdG:1793)

煙突から黒い煙が出てくる。

- (3) Ihr Klavierspiel ist bis in die oberen Räume *heraufgeklungen*. (BW:483)

彼女のピアノの演奏が上の部屋まで響いてきた。

- (4) Auf wen zeigt er *hin*? (BW:601)
彼は誰を指しているの？
- (5) Der Wegweiser zeigt zum Pfad *hinauf*. (BW:563)
その道標は上の小道を指している。
- (6) Er horchte in das dunkle Zimmer *hinein*. (BW:573)
彼はその暗い部屋の中の物音に耳を傾けた。
- (7) Der Pfad senkt sich allmählich zum Tal *hinab*. (BW:561)
その小道は緩やかに谷へ下っている。
- (8) Das Wort ist mir einfach so *herausgerutscht*. (BW:491)
口が滑って、言葉がついそのまま出てしまった。
- (9) Der Fleck geht nicht mehr *herunter*. (BW:526)
このシミはもはや落ちない。
- (10) Die Farben heben sich gut aus der Umgebung *heraus*. (BW:488)
その色は周りより際立っている。
- (11) Der Abend senkt sich *herab*. (BW:479)
夜のとばりが降りてくる。
- (12) Diese Maschinen werden nur noch im Ausland *hergestellt*. (BW:513)
この機械はもう海外でしか生産されない。

2.2 her と hin の空間的意味に見られる四つの傾向と非空間的意味との関連づけ³

2.2.1 Latzel(1979)

Latzel (1979) は、その多様性により教授上困難な her と hin、およびその合成語の用法を広範囲にわたって記述・分類する。her と hin の中心的意味・用法は、方向の三要素（起点 Start・通過領域 Weg・目標 Ziel）から、以下の三つに大別される。なお ii の „Ziel“-betonte Sicht は hin の特徴、 „Start“-betonte Sicht は her の特徴として記述されている。

- i) „Start-Weg-Ziel“-betonte Sicht 「起点・通過領域・目標」に重点が置かれる視野
- ii) „Ziel“-betonte Sicht, bzw. “Start”-betonte Sicht
「目標」に重点が置かれる視野または「起点」に重点が置かれる視野
- iii) „Weg“-betonte Sicht 「通過領域」に重点が置かれる視野

この分類により、単に「話者への方向」と「話者から離れる方向」とはいえない空間的用法の記述と分類が可能になる。例えば Er schlich hinter ihm *her*. (BW:513) 「彼は彼の後をこっそりついて行った」の her は、話者の方向を表す必要もなく、起点との結合も見られないが、移動

の継続に重点が置かれることから iii に分類される。また *Das Buch gehört hier hin.* (BW:580) 「その本はここに置く」の *hin* は、*hier* が目標であるため「話者から離れる方向」としては説明できないが、目標に重点が置かれるという点で ii に分類される。

このように Latzel (1979) の分類は *her* と *hin* の多様な空間的用法を構造的に捉えるという点で、極めて有益である。しかしその一方で次の問題点が挙げられる。まず i については詳細な意味が記述される一方、ii と iii については、具体的な用法の説明のみに終始している。特に iii における *her* と *hin* の用法は共に用いられる前置詞句の特徴が大きく異なるにも関わらず、その相違への配慮に欠けている。つまりこの分類の構造的性は有益だが、下位分類の相互関係は考慮されていない。さらに非空間的用法も取り扱われるものの、用法の説明のみで、空間的用法との区別や分類上の位置づけは極めて不明瞭である。

2.2.2 コア図式論に基づく構造的意味記述

Latzel (1979) の問題点を解決し、空間的用法と非空間的用法との関連付けを行うには、まず空間的用法全体をある基準に従って分け、互いに関連づけるという構造的な意味記述に至るための方法論が必要である。ここでは田中 (1997) のコア図式論を導入し、これに基づく *her* と *hin* の構造的意味記述を提示する。

田中 (1997:63-64) は、英語前置詞の意味研究の動向を「意味成分抽出論」と「複数図式論」に二分し、両者は前置詞の意味の構造化を図るものであると説明する。意味成分抽出論は、語の意味を有限個の意味要素（意義素）に分析され、この意義素の組み合わせで記述できるという前提に立つ。この理論の主眼は、実例から抽出される最大公約数的な意味（「コア」）を意義素の束として取り出すことにある。それに対して、複数図式論は、語のコアを抽出・記述することは有効ではないとし、前置詞の多義間の関係を「動機づけられた関係ネットワーク」とする。これは語義間の関係を連鎖図で表すことから *Lexical Network Model* (LNM) とも呼ばれる。

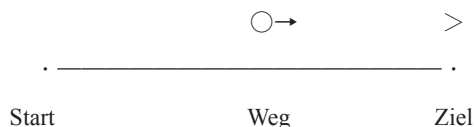
田中 (1997) によると、意味成分抽出論（コア理論）の問題点は、コアのみで全ての用法を説明できない点にある。また複数図式論では、意義の数だけ図式が提示されるため、意義の数が多い場合、どの意義に分類すべきかの判断が困難な用法が増え、多義間の相互関係も複雑でとらえがたくなる。これらの問題点の解決策として、田中 (1997:76f.) は「コア図式論」を導入する。これは「イメージ図式」「焦点化」「図式の変換」を備えた理論で、前置詞の意味をまず単一のイメージ図式（コア図式）で記述し、その多義的用法を焦点化とコア図式の変換によって説明する。コア図式により、前置詞は単一の最も典型的なイメージ図式で表示され、類似する用法を有する前置詞との区別も明確になる。

本論文では、このコア図式論を用い、*her* と *hin* を基本的な空間的用法を単一のイメージ図式で表す。先に挙げた Latzel (1979) の分類 i には、次のように *her* と *hin* の移動方向全体をとらえる意味が記述されている。本論文ではこれをイメージ図式として導入する。

[her(-)のイメージ図式]

her: Mit *her* gibt man an, daß sich etwas auf ein Betrachterauge zu bewegt, oder daß sich etwas von einer Startposition auf das Betrachterauge zu (=Zielposition) richtet. Das Auge (>) befindet sich in (nahe) der Zielposition und hat den, bzw. einen Startpunkt im Blickfeld. (Latzel 1979:4)

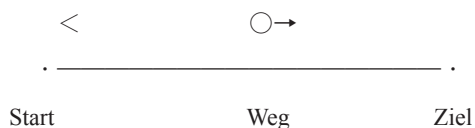
herという語によって陳述される内容は、あるものがある観察者の目の方へ動いていくこと、またはあるものがある起点から観察者の目の方へ（つまり目標地点の方へ）方向づけられていることである。目 (>) は目標地点（の近く）にあり、特定もしくは不特定の起点はその視野に入っている。



[hin(-)のイメージ図式]

hin: Mit *hin* gibt man an, daß sich etwas von einem Betrachterauge weg auf ein Ziel zu bewegt, oder daß sich etwas von der Position des Betrachterauges aus auf einen Zielpunkt richtet. Das Auge (<) befindet sich in (nahe) einer Startposition und hat das Ziel im Blickfeld. (Latzel 1979:4)

hinという語によって陳述される内容は、あるものが観察者の目から去り、ある目標の方へ動いていくこと、またはあるものが観察者の目の位置からある目標地点へと方向づけられていることである。目 (<) は起点（の近く）にあり、目標を視野にとらえている。



herとhin及び合成語her-とhin-の多義は、このイメージ図式により統一される。多義の一つ一つの説明は、イメージ図式の一部に焦点を当てることにより可能になるとともに、構造的に統一することができる。本論文ではLatzel (1979)による方向の三要素に、hin und herという用法に基づく要素を加え、次の四つの傾向を提示する。

第一の傾向は、イメージ図式中の目 (<) で示される話者の位置、即ちherの方向の目標側およびhinの方向の起点側に焦点があてられる傾向である。この傾向は、her(-)の場合、Komm her! 「こっちに来い！」のように〈話者への方向の関与〉を示す用法に認められる。一方hin(-)の用法は、一般に起点より目標や通過領域との結合が強いため、純粹に起点側のみが焦点化されることはないかもしれないが、例えばGeh hinaus! 「出ていけ！」のように話者のいる起点側の領域内から外へ方向を表す場合は、話者から離れるという起点側の要素が特に明瞭に認められる。hin(-)に関してはこのような用法に見られる〈話者から離れる方向の関与〉を第一の

傾向とする。

第二の傾向は、目 (<) で表示される話者の位置とは反対側、即ち her の起点側および hin の目標側が焦点化される傾向で、her(-) の〈起点との結合〉が見られる用法 (例: Vom Fenster her zieht es. 「窓の方から風が入ってくる」) と hin(-) の〈目標との結合〉が見られる用法 (例: Zum Bahnhof hin lief Hans 「駅の方へハンスは走っていった」) に認められる。

第三の傾向は、図式中の通過領域が焦点化される傾向である。her(-) に関しては、Er geht hinter ihr her. 「彼は彼女の後をついていく」の hinter ihr に見られる〈移動中の状態との結合〉、hin(-) に関しては Der Weg läuft am Fluß hin. 「その道は通りに沿って進んでいる」の am Fluß に見られる〈経過との結合〉という特徴が、この傾向に該当する。

上記の三傾向に加え、本論文ではさらに hin und her 「行ったり来たり」という言い回しに由来する第四の傾向を提示する。この言い回しについて、Latzel (1979:4f.) は、Fred erwartete Inge. Aufgeregt ging er hin und her. 「フレートはインゲを待ちわびていた。彼は興奮して行ったり来たりしていた」のように振り子運動を表す例と、Aufgeregt flatterten die Vögel hin und her. 「興奮して鳥たちはあちこちへ飛び交っていた」のようにジグザグ運動を表す例を挙げ、これらは hin と her の分類 i が結合した結果であるとする。問題は、Latzel (1979) 自身も認めているように、この動きには話者の関与が認められない点にある。つまり本論文でいう第一の傾向にはあてはまらない。さらに振り子運動やジグザグ運動の重点および共通点はそれが繰り返されることにあり、始まりと終わりは特に意識されないため、起点や目標に重点が置かれる第二の傾向には結びつかない。一方、第三の傾向の「移動中の状態」(例文中の aufgeregt) と「経過」については多少の関連は見られるが、振り子運動とジグザグ運動の重点である「繰り返し」という要素を積極的に示すものではない。以上のことから、新たに hin und her に基づく第四の傾向〈繰り返される行き来〉を提示する。

この四つの傾向により、空間的用法と非空間的用法は構造的に関連づけることができる。

her の第一の傾向〈話者への方向の関与〉には空間的意味〈話者への方向〉から転じて、出来事の結果を認識する主体を要する非空間的用法に関連付けられる。製品の完成を受け止める存在を要する例 (12) の herstellen 「製造する」等がこれに該当する。第二の傾向〈起点との結合〉は、Das läßt sich von der Theorie her leicht beweisen 「これは理論的観点から簡単に証明できる」のように von や aus の前置詞句等の起点表現を慣用的に伴う非空間的用法や、離脱を表す非空間的用法に認められる。第三の傾向〈移動中の状態との結合〉を持つ非空間的用法には、Auf dem Ball soll es glänzend hergegangen sein. 「ダンスパーティは華やかに進行したそうだ」等、出来事の進行中の状態を表す用法がある。

hin の第一の傾向〈話者から離れる方向の関与〉を有する非空間的用法としては、ある認識主体にとって、ある対象 (の状態) が認識できなくなること、即ち〈消滅・衰退〉を表す用法 (例: Das Auto ist hin. 「その車は壊れてしまった」) が挙げられる。第二の傾向〈目標との結合〉

は、非空間的な目標を伴う用法（例：Sie hat ihn auf seinen Fehler hingewiesen. 「彼女は彼に間違いへの注意を喚起した」）に見られる。第三の傾向〈経過との結合〉を持つ非空間的用法には、ある事柄の範囲や超えることを表す用法（例：Der Prozeß hat sich wochenlang hingezogen. 「その訴訟は数週間にわたって続いた」）などが挙げられる。

hin und herに由来する第四の傾向〈繰り返される行き来〉には、繰り返しにより行為そのものの意味が感じられなくなるという「意味飽和 semantic satiation」に通じる用法が見られる。例えばDie Diskussion ging *hin und her*, ohne zu einem Ergebnis zu führen. (BW:560)「議論は、結論に至ることなく、あちこちへ行ったり来たりした」においてhin und herは、繰り返されるが結果が出ない様を表す。この行為の単調さと無意味性は、単独形のherとhinの非空間的用法にも随所に見られる。herは動詞betenと共にein Gedicht *herbeten*「ある詩を機械的に唱える」という機械的口誦を表す。このherの用法に見られる行為の単調性は第四の傾向にのみ顕著に見られるが、他の傾向には見られない。hinにもまた、ある目標への無関心な取り組みを表す用法が多く見られる。また後述するように動詞puschen, schustern等と「ぞんざいに仕上げる」ことを表す用法（例35）、動詞hauen, kritzeln, schmieren, schreiben, werfen等と共に「殴り書きをする」ことを表す用法（例33）などが挙げられる。また例（34）、（57）、（58）のように「考えなしにいついそう言ってしまう」という思慮のない発言行為や例（59）のように「一人でつぶやく」といった非発信的な言動を表す用法もある。これらのhinの用法は一応の目標があることから、hinの第二の傾向に関連付けられるが、目標に対する無関心さは第二の傾向のみでは説明できない。

このherとhinの単独用法の無意味性は、第四の傾向〈繰り返される行き来〉に容易に関連付けることができる。本来hin und herの〈行き来〉においてhinはその場を離れる方向を示し、herは戻る方向を示す。このhinが表す「離れる方向」は、積極的な目標をもつものではなく、一旦その場を離れるがすぐに元に戻ることを前提とする消極的なものである。つまり単独のhinの第四の傾向は〈消極的な目標の関与〉といえる。一方、戻る方向を示すherの例としては、後述の〈返却〉を表す例(42)があることから、単独のherの第四の傾向を〈戻る方向の関与〉とする。「行き来」が伴う「繰り返し」の要素はhinの「離れる方向」ではなく、herの「戻る方向」に顕著に現れる。「再び」を表すwiederはIch bin *wieder da*. 「ただいま」のように「戻ってくる」場合に用いられ、「繰り返す」という日本語にも「返」という戻る要素が含まれる。おそらく「かえる」ことは同じ経路を再びたどることから、「再」に通じるのであろう。herの用法に関して第四の傾向は〈返却〉と繰り返しに通じる単調性及び無意味性という形で比較的明瞭に現れる。それに対して単独のhinの第四の傾向は、むしろ目標への無関心な取り組みとして、第二の傾向とともにそこに潜む形で現れる。

以上、コア図式論に基づく四つの傾向を提示した。これらを「範疇」ではなく、「傾向」とする理由は、多くの用法において複数の焦点化が関わることが往々にして起こるからである。例えばVon der Tür *her* zieht es. (BW:478)「ドアから風が入ってくる」という場合、確かにherは

起点と結合しているが、同時に話者への方向も表現している。この焦点化に基づく傾向は、一つのイメージ図式に統合されるもので、決して排他的なものではない。

2.3 空間的意味から逸脱する要素の検出方法

空間的用法には基本的な空間的意味とはいえない要素を含む用法がある。後述する例(15)の *hineinlaufen* 「衝突する」に見られる空間的方向は、単なる領域内への移動方向以外の特殊な意味を帯びている。このような基本的な空間的意味からの逸脱は、空間的意味以外の意味の付与であることから、非空間的意味の萌芽と考えられる。

McIntyre (2001) は、her- と hin- をはじめとする合成語を二重不変化詞とし、分離前綴り用法に関して概念意味論 Conceptual Semantics に基づく LCS (Lexical conceptual structure) という手法を用いて意味記述を行う。従って単独形の her と hin は対象とはならず、その特徴や傾向もあまり考慮されていない。しかし、動詞と結合する her- と hin- の用法を広く扱い、本論文でいう非空間的用法も網羅的に分析している。その動機づけ motivation と多義 polysemy の分類は、additive verb 「付加的動詞」を出発点とする。それは、動詞と二重不変化詞の意味さえ知っていれば、完全に推定されうるような意味を持つ分離動詞であり、この結合において二重不変化詞は基本的な空間的意味を表す。これを出発点とすれば、特殊化された空間的用法と様々な非空間的用法の検出が可能となる。著者自身も言及している通り、この規定は必ずしも明瞭ではないが、空間的意味から逸脱する要素を検出するという本論文の目的には役立つ手法である。

ここでは、McIntyre (2001) を参考に、2.2 で記述した4つの傾向を持つ空間的意味と各語彙が基本的に持つ上下内外という方向との組み合わせを her(-) と hin(-) の基本的な空間的意味(字義通りの意味)とし、動詞や他の文成分との組合せからは推定できないような要素を、本来の空間的意味から逸脱する要素として扱うことにする。

3. 中間的事例の分析

ここで中間的事例として挙げる空間的用法は、2.1 で挙げた空間的用法の条件に合致するにも関わらず、字義通りの意味のみでは推定できない用法である。一方、中間的事例とする非空間的用法は、空間的用法の条件を部分的に満たす空間に関わる用法(〈体内の出来事〉を表す用法)や基本的には空間的用法とはいえないが、her(-) と hin(-) の基本的な空間的意味が保たれている用法(〈所有の変化〉を表す用法)である。ここでは中間的事例のうち顕著な用法として、限定的な場面での空間的用法、動作の慣用的な方向を示す空間的用法、所有の変化を表す用法、体内での出来事を表す用法を扱い、具体例に基づいて、その用法の特徴と空間的用法と非空間的用法の関連を説明する。

3.1 限定的な場面での空間的用法

3.1.1 限定された空間に由来する空間的用法：〈起床〉を表す *heraus* と 〈衝突〉を表す *hinein*

*heraus*には、次のように寢床を起点とし、動詞を伴わない用法がある。これは確かに寢床という起点領域から出る空間的方向を表し、〈起点との結合〉という *her* の第二の傾向を示すが、その一方で「起床する」という別の意味も含んでいる。

- (13) *Heraus aus dem Bett!* (BW:484)

寢床から出なさい！

〈起床〉の意味は、寢床という限定された空間に由来するが、他の非空間的用法からは独立した用法であると思われる。確かに *heraus* の非空間的用法のうち、*aus* 前置詞句を伴う用法は存在するものの、次のように悪習や苦境、強い感情など（抜けがたい）状況からの離脱を表す例が主で、起床に通じるような用法は見られないからである。

- (14) *Er findet nicht aus dieser Angelegenheit heraus.* (BW:486)

彼はこの問題から逃れるすべがない。

- (15) *Er kam aus dem Staunen nicht mehr heraus, als er hörte, was sie alles vollbracht hatte.* (BW:489)

彼女がやってのけた全てを聞いたとき、彼はその驚きをもはやとどめることができなかった。（←驚きの感情から抜け出せなかった）

同様に、*hineinlaufen* の表す「衝突」もまた、限定された空間に由来する意味である。次の例の *hineinlaufen* は、オートバイへ向かう空間的方向を含んでおり、〈目標との結合〉という *hin* の第二の傾向を持つとともに、オートバイの中へ入っていくという字義通りの意味ではなく、オートバイに突っ込んでいく、つまり衝突することを表す。〈衝突〉の意味は、乗り物の周囲という非常に限定された空間なくしては成立しえない。

- (16) *Das Kind ist in ein Motorrad hineingelaufen.* (BW:574)

その子はオートバイに衝突した。

3.1.2 ある特定の行動パターンを表す空間的用法：〈不意の到来〉を表す *her*

her は動詞 *gehen* と結合して「(外部から)いきなりふらりとやってくる。(そして何も考えずにさっさと～する)」という意味で用いられる。この意味は〈話者への方向〉を表すことから *her* の第一の傾向を持つ。しかしその到来が話者にとって不意であること、また行為者がその移動後、無頓着な行動に出るという点で、字義の意味から逸脱している。

- (17) *Nach diesem Streit geht er einfach her und tut, als sei nichts geschehen!* (BW:503)

この争いの後、彼はふらりとやってきて、何事も無かったかのようにふるまうのだ！

この用法には、到来の不意性と到来する者に対する不快の念という非空間的な内容が含まれる。到来の不意性と不快の念に関連する非空間的用法として、次の襲来、襲撃を表す *herein* (動詞 *brechen* と結合) や *her* (動詞 *fallen, gehen* と結合) の用法が挙げられる。

- (18) Ein Gewitter brach über uns *herein*. (BW:499)

嵐が我々を不意に襲った。

- (19) Die Stare sind über die Kirschen *hergefallen*. (WdG:783)

ホシムクドリたちは、サクランボをさんざん食い荒らしてしまった。

- (20) Alle Zeitungen fielen über den Politiker *her*. (BW:503)

全ての新聞がその政治家を攻撃した。

これらの用法は全て *über* 4格を伴うが、嵐やホシムクドリの襲来の方向が常に上方からとは限らない。つまりこの前置詞句の表現内容は空間的な方向よりも、上方からの到来に由来する不意性と不快の念である。事実例 (20) のように全く空間的要素が含まれない例も多数みられる。また空間的用法にも不意の到来に通じるものがある。*herüber* は *kommen, schauen, sehen* と結合し、「非公式にちょっと立ち寄る」ことを表す。この「非公式に」というのは公に知らされていないという点で、不意性に通じる。また *herein* は動詞 *schneien* と共に「ふらりと立ち寄る」ことを表す。これは「不意に舞いこむ」ことを表す *schneien* の意味に由来すると考えられるが、*herein* が不意性と結合する事例と見なすことができる。

- (21) Komm doch nachher auf ein Glas Wein zu uns *herüber!* (BW:1762)

後でちょっとワインでも飲みに来てくださいよ！

- (22) Er ist mitten in der Nacht bei uns *hereingeschneit*. (WdG:1801)

彼は真夜中にふらりと私たちのところに立ち寄った。

3.2 動作の慣用的な方向を示す空間的用法：〈転倒〉を表す *hin*

hin は、動詞 *donnern, fallen, fliegen, hauen, legen, schlagen, purzeln* などと共に自動詞構文で「転ぶ、倒れる」という意味を表す。また動詞 *legen, setzen, werfen* と共に再帰構文でも同様の意味を表す。この用法は例 (25) の *auf den Boden* など目標を表す語句を伴うこともあるため、*hin* の第二の傾向を持つとも考えられる。しかしその場に転倒するという動作の目標は決して積極的に目指すものではなく、この動作が持つ慣用的な方向にすぎない。これは目標と呼ぶにはあまりにも消極的であることから、第四の傾向〈消極的な目標の関与〉にも関連付けることができる。

- (23) Er ist auf dem glatten Parkett *hingedonnert*. (BW:570)

彼はつるつるした寄木張りの床でどしんと音を立てて転んでしまった。

- (24) Ich bin gestolpert und beinahe *hingeflogen*. (BW:579)

私はつまずいてすんでのところ転んでしまうところだった。

- (25) Der Junge purzelte auf den Boden *hin*. (BW:582)
少年は床にひっくり返った。
- (26) der Länge lang [nach] *hinschlagen* (BW:583)
棒のようにぱったりと倒れる
- (27) Ich hab mich ständig *hingelegt*. (BW:582)
私は転びっぱなしだった。
- (28) Gestern habe ich mich ein paarmal ganz böse *hingestellt* (beim Schlittschuhlaufen) (BW:584)
昨日私は何度かひどく尻餅をついてしまった。(スケートで)

転倒する際の足元へ向かう方向は、確かに知覚可能と見なされる三次元空間に属する空間的方向で空間的用法の条件にはあてはまるが、*hin*の字義通りの空間的意味には無い特殊化された方向である。動詞 *fallen*, *fliegen*, *hauen*, *legen*, *purzeln*, *werfen* に関しては、単独で転倒を表す用法があり、足元への方向は動詞本来の意味に由来すると考えられる。しかし *donnern*, *schlagen*, *legen*, *setzen* にはそのような例は見られない。おそらく *donnern* や *schlagen* には、*fliegen* や *hauen* といった動詞が表す動作の勢いによく似た要素を持つことから、また *legen*, *setzen* に関しては「横たえる、置く」に由来する下への方向をとる動作であることから、第二の傾向および第四の傾向を持つ *hin* と結合して転倒を表すようになったと考えられる。従って〈転倒〉は、*hin* とある種の動詞との結合による特殊化された用法といえる。

〈転倒〉に見られる目標の慣用性と消極性は、まさに第四の傾向である *hin* und *her* の〈繰り返し〉に結びつく。積極的な意図を持たない動作は、繰り返されることにより、慣用化されるからである。これに関連する *hin* の空間的用法としては、その場の適当な位置への方向を指す用法がある。

- (29) Leg das Messer sofort *hin*! (BW:582)
(子供等に命令口調で) そのナイフをすぐに置きなさい!
- (30) Ich lege das Kind abends um sieben Uhr *hin*. (BW:581)
私は子供を毎晩7時に寝かしつける。
- (31) Setz dich auf meinen Platz *hin*, ich stell mich *hin*. (BW:584)
君は私の席に座りなさい。わたしは立っているから。
- (32) Sie hatte den Hörer *hingehauen* und war einfach ohne Mantel hinausgerannt. (BW:580-581)
彼女はガチャンと受話器を置いて、そのままコートも着ずに出ていった。

目標の慣用性と消極性に関連する非空間的用法には、動詞 *hauen*, *kritzeln*, *schmierern*, *schreiben*, *werfen* 等と共に「ある事柄を殴り書きする」(例33)、動詞 *puschen*, *schustern* 等と共に「ぞんざいに仕上げる」(例34)を表す用法がある。これらは〈転倒〉に見られる動作の勢いも含む。ま

た後述する〈思慮なしの発言〉(例35, 57-59) もこれに該当する。

- (33) Er hat dieses Referat in letzter Minute *hingehauen*. (BW:581)
彼はこの報告を殴り書きして、ぎりぎりで仕上げた。
- (34) Das Referat ist aber *hingeschustert*. (BW:584)
そのレポートはしかしぞんざいに仕上げられたものだ。
- (35) Das war nicht ernst gemeint, sondern nur so *hingesprochen*. (BW:584)
それは真剣に考えたのではなく、ただ思いついたことをそのまま口にしただけだ。

3.3 所有の変化を表す用法

3.3.1 受け取る側の動作を表す用法：〈要求〉を表す her, 〈入荷〉を表す herein

her には、動詞を介さず、前置詞句や名詞と結合して要求を表す用法がある。この用法は、要求された対象が話者へ向かって移動するという点で、her の第一の傾向〈話者への方向の関与〉が強いが、単なる話者への空間移動のみならず、対象の所有の要求も含まれている。

- (36) Die Schere brauche ich, *her* damit! (WdG:1782)
そのはさみが必要だ。こちらによこしてくれ。
- (37) „Waffen *her*!“, schrien die Banditen. (BW:477)
「武器をよこせ!」と、盗賊一味は叫んだ。

さらに her は、動詞 kommen と結びついて、ある対象が自分のところへ空間的に移動するというよりも、自分の所有権内に至ることを表すこともある。また herein にも、動詞 kommen と結合して商品などの入荷を表す用法がある。

- (38) Wo soll es (das Geld o. ä) denn auch *herkommen*? (BW:504)
それ(その金等)が一体どこから手に入るというのだ。
- (39) Die neuen Stoffe kommen erst nächste Woche wieder *herein*. (BW:500)
その新しい生地は来週になってからまた入荷します。

これらの用法は、実際に物品の空間移動を伴うため極めて空間的要素が強く、〈話者への方向〉という her の第一の傾向にも合致するが、その一方で所有の変化という非空間的要素も含まれている。また入荷を表す herein に関しては、さらに商品の入荷という場面に限定されるため、さらに意味が特殊化されている。

3.3.2 支出する側の動作を表す用法：〈支払い〉を表す hin

hin は他動詞構文で4格目的語に金額を取り、「ある金額を支払う」という意味で用いられることがある。結合する動詞は blättern 「紙幣を一枚一枚数えて置く」、legen 「置く」、zählen 「数

える」等で、紙幣や硬貨を数えながらテーブル等に置く動作が想定される。この用法にも、空間的方向の他、所有の変化が含まれており、その場の適当な位置への方向という動作の慣用的な空間的方向(3.2)を表す *hin* の特徴にも関連する。ただし、支払う相手という特定の目標が想定されることから、より第二の傾向の強い用法と見なされる。

(40) *Dafür mußte er hundert Mark hinblättern.* (BW:570)

その代価としてかれは100マルクを支払わなくてはならなかった。

(41) *Für dieses Haus mußte er 500 000 Mark hinlegen.* (BW:581)

この家の代金として彼は50万マルク支払わなくてはならなかった。

3.3.3 返還にかかわる動作を表す用法：〈返却〉を表す *heraus*

heraus は動詞 *geben* と共に、他動詞構文で、返される物品を表す4格目的語をとり、「保管物などを返す」という意味で用いられる。返却の対象が返却する側から受け取る側へ実際に空間移動するため、空間的方向を含む。また返すという要素が必須であることから、これは〈戻る方向の関与〉という *her* の第四の傾向に関連が深い。〈返却〉を表す用法もまた、所有の変化という非空間的要素を伴い、その場面は非常に限定されている。

(42) *die Garderobe herausgeben* (BW:487)

(ホテルなどのクロークに預けられていた) 携帯品を (預けた本人に) 返す

以上の〈所有の変化〉を表す用法、即ち〈要求〉を表す *her*、〈入荷〉を表す *herein*、〈支払い〉を表す *hin*、〈返却〉を表す *heraus* は、いずれも空間的方向を含み、所有の変化という要素を必須とする。特に〈入荷〉〈支払〉〈返却〉の表現は場面が限定されるため、〈所有の変化〉以外の非空間的要素が加わり、全体として非空間的用法としての要素が強くなる。

3.4 体内での出来事を表す用法

体内は三次元空間であり、そこで起こる物理的現象の表現は、本質的には空間的用法と見なされそうなものであるが、本論文の規定では非空間的用法であり、実際空間表現に例えたメタファーと見なされる。しかしそもそもなぜこの種の表現は、非空間的もしくはメタファーと見なされるのであろうか。3.4で具体例を検証した後、4でこの問題について考察する。体内での出来事としては、〈体内摂取〉と〈体内からの放出〉を表す用法を取り扱う。

3.4.1 〈体内摂取〉を表す用法：〈嚥下〉を表す *herunter/hinunter* および *hinein*⁴

herunter は動詞 *bringen, kriegen* と、*hinunter* は動詞 *gießen, schlucken, spülen, würgen* や *mit* 前置詞句と結合して、「飲み下す」という意味を表す。一方 *hinein* は動詞 *bringen, laufen(lassen)* を伴い他動詞構文となる)、*schlingen* 等、及び前置詞句 *in sich* を伴い、「飲み込む」という意味を表す。

全て他動詞構文で、摂取する対象を4格目的語にとる。

- (43) Ich bringe keinen Bissen mehr *herunter*. (BW:525)
私はもう一口も入らない。
- (44) Er schluckte die bittere Medizin *hinunter*. (WdG:1861)
彼はその苦い薬を飲み込んだ。
- (45) Er spülte schnell den letzten Bissen mit einem Glas Wein *hinunter*. (BW:599)
彼は急いで最後の一口をワイン一杯で流し込んだ。
- (46) Er mußte das trockene Brot *hinunterwürgen*. (WdG:1861)
彼はそのひからびたパンを無理矢理飲み下さなくてはならなかった。
- (47) *Hinunter* mit dem Bier! (WdG:1861)
そのビールを飲み下せ!
- (48) Er hat eine ganze Flasche Schnaps in sich *hineinlaufen* lassen. (BW:574)
彼はシュナップスを一瓶丸ごとのどに流し込んだ。
- (49) Der Hund schlang das Fleisch in sich *hinein*. (BW:576)
犬はその肉をがつつ食べた。

〈嚥下〉を表す用法について、下への方向を表す *-unter* の対に関しては *herunter* と *hinunter* が競合している一方、ある領域内への方向を表す *-ein* の対に関しては *hinein* のみである。この不均衡はなぜ生じたのだろうか。

まず *herunter* と *hinunter* を比較すると、結合する動詞の数からいえば、*hinunter* の方が優勢であり、さらに例示したように *mit* 前置詞句とのみ結合する用法も見られる。この点から「飲み下す」という用法は *herunter* より *hinunter* の方が中心的であるといえる。Latzel (1979:70) もまた、*hinunter* についてのみ、この意味を認めている。一方 *herunter* と *hinunter* の対立においては、習慣的に *herunter* の方が選択されるという傾向もあり、Brennenstuhl (1977:53) の指摘によると、*herunter* のみを用い、*hinunter* は一切用いないという母語話者も少なからず存在する。また「飲み下す」という用法が *herunter* と *hinunter* の両方と結合しうる理由は、その動作の性質や結合する動詞から次のように推測することができる。つまり「飲み下す」という出来事には、〈飲み下す〉行為の主体が摂取した対象を受け入れるという局面がある。この観点からいえば、行為主体を話者に見立て、*her* の第一の傾向〈話者への方向の関与〉が反映される用法として *herunter* が選択されるのは、十分考えられることである。その一方で、〈飲み下す〉主体は、飲み下す対象は目の前にあった状態から自分の体内に消えていくのを認識する。あるいは〈飲み下す〉主体は、取り込まれたものが飲み込まれ、自分の体内を下りてゆく経過を強く感じるかもしれない。すると〈話者から離れる方向の関与〉という第一の傾向、あるいは〈経過との結合〉という第三の傾向を持つ *hinunter* の方が適当となる。実際、*herunter* は「取り込む」ことを意味

する *bringen*, *kriegen* と結合し, *hinunter* の方は「飲む」という行為 (*schlucken*, *würgen*) や, 「注ぐ, 流す」といった移動過程の様態を表す動詞 (*gießen*, *spülen*) と結合している。

それに対して *-ein* の対に関しては, 〈嚙下〉を表す用法に *herein* が見られないことに加え, *hinein* の用法では, *in sich* という目標を表す前置詞句を伴い, *hin* の第二の傾向も示している。また *-unter* では, *herunter* が動詞 *bringen* と結合するが, *-ein* において動詞 *bringen* と結合するのは *herein* ではなく *hinein* である。

こうした *-unter* と *-ein* との相違は, *-ein* 〈ある領域内への方向〉と *-unter* 〈下への方向〉の示す方向の本質的な相違に起因すると考えられる。その目標を比較すると, *-ein* の〈領域内〉は非常に限定される一方, *-unter* の〈下〉は下に位置する以外の限定はない。また〈下への方向〉は目標となる〈下〉ではなく, むしろ起点側である上の位置によって決定されることが多い。そのため *-unter* の対では起点関与の傾向を持つ *herunter* の方が優勢となる。それに対し, *-ein* が表す方向は, 領域内という目標が非常に重要な役割を果たすことから, 〈目標との結合〉の傾向を持つ *hinein* の方が優勢である。

このように概して *-unter* では *herunter* が優勢であり, *-ein* においては *hinein* の方が優勢であることを念頭に置いた上で, 〈嚙下〉の分布をみると, やはりこの用法は *her-* よりも *hin-* の方が中心的であるという結論に達する。つまり *-unter* では *hinunter* の方が〈嚙下〉を表す用法においては優勢であるが, そこに *-unter* の対において優勢である *herunter* が〈取り込む〉という観点から介入する。それに対して本来 *hinein* の方が優勢である *-ein* の対においては, 元来 *hin-* が中心的な〈嚙下〉の用法において, *herein* が介入する余地はなく, 〈取り込む〉という意味を表す動詞 *bringen* すら *hinein* と結合する。逆に〈嚙下〉において *her-* が優勢であると想定すると, この現象は説明できない。

〈嚙下〉を表す用法において *her-* よりも *hin-* の方が中心となる背景には, 次のことが考えられる。人間の体内はその主体にとって最も近い場の一つでありながら, 認識しがたく意のままにならない場である。いかなる名医であろうとも自分の体を治療したり, 手術することは困難であろう⁵。つまり自分の体内への働きかけは, 〈自分の内部への方向〉をとってはいるものの, それは〈自分の認識領域への方向〉ではない。〈体内摂取〉に, 話者への方向を表す *her-* ではなく, 話者から離れる方向を表す *hin-* の方が適用されるのは, 体内という領域が行為者にとって自分の認識領域ではないという点に起因する。次節で取り上げる〈体内からの放出〉を表す用法には, 話者への方向を表す *heraus* が用いられるが, これも, 〈体内〉が行為者にとって自分の認識領域ではないことを裏付けるものである。〈体内〉が行為者自身の認識領域ではないという観点に基づくことにより, 〈体内摂取〉を表す *hin(-)* には, *hin* の第一の傾向〈話者から離れる方向の関与〉が, 〈体内からの放出〉を表す *her(-)* には〈話者への方向の関与〉が関与していると判断することができる。

3.4.2 体内からの放出を表す用法：〈嘔吐〉、〈発言行為〉を表す *heraus*

話者から離れる方向を表す *hinein* が〈体内摂取〉に用いられるのに対して、自分の身体をいわば起点に見立てる〈体内からの放出〉には話者への方向を表す *heraus* が用いられる。例 (50) は〈嘔吐〉を表す用法で、行為者を話者に見立て、体内という認識しがたい領域から認識できる領域への方向を話者への方向と見立てた非空間的用法であり、*her* の第一の傾向〈話者への方向の関与〉と第二の傾向〈起点との結合〉を有する。また体内からの放出を表す用法として、例 (51)～(54) のように様々なタイプの〈発言行為〉を表す用法⁶がある。

- (50) Er hat alles, was er gegessen hat, sofort wieder *heraus*gebrochen. (BW:485)
彼は食べたものを全部すぐにまた吐いてしまった。
- (51) Es fuhr mir so *heraus*, es war nicht böse gemeint. (BW:486)
それは私の口が不意にそう言っただけで、全く悪気はなかったのだ。
- (52) Jetzt kommt endlich mit der Wahrheit *heraus*! (BW:489)
さあいいかげんに本当のことを吐き出してしまえ!
- (53) Er brachte (vor Angst, Schreck, Erschöpfung) kein Wort *heraus*. (BW:485)
彼は(不安、驚き、疲れのあまり)一言も発することができなかった。
- (54) Sie plappert alles so *heraus*, wie es ihr in den Sinn kommt. (BW:490)
彼女は全て思い浮かぶままにべらべら話す。

〈発言行為〉の用法には自動詞構文と他動詞構文がある。他動詞構文の場合、発言内容が4格目的語で表現される。一方自動詞構文の場合、発言内容の表現方法について二つのタイプがある。まず発言内容が主語となるタイプ(例51)と、主語は発言者で、発言内容は *mit* 前置詞句で表現されるタイプ(例52)である。他動詞構文の4格目的語に相当するものが *mit* 前置詞句で表現するのが可能な理由は、おそらく発言内容と発言行為は密接に結びついているからであろう。通常他動詞構文の4格目的語は、*die Postkarte schicken* 「はがきを送る」の *die Postkarte* 「はがき」のように、動作から独立して確固たるものとして存在する。一方発言内容は発話すると同時に存在し、発話行為の終了と共に終了する。このような発話行為と発言内容の密接な関係は日本語の表現にも垣間見られる。発話を表す典型的な表現「言う」は、その発話内容を助詞「を」ではなく、「AとB」や「Aと一緒に」というように並列や同時性を表す助詞「と」で受ける。これもまた発話行為と発言内容が密接な関係にあることを裏付けるものである。

発話行為に関連する他の用法として、〈機械的口誦〉を表す *her* や *herunter* がある。*her* と *herunter* は、動詞 *beten*, *lesen*, *sagen* などと共に「機械的に・感情をこめずに単調に(暗唱する・唱える)」という動作を表す。この単調性は、繰り返しによる新鮮味の消失に由来すると考えると、*her* の第四の傾向〈戻る方向の関与〉に関連づけることができる。しかし、*heraus* のように認識できる領域への方向という点から、第一の傾向〈話者への方向の関与〉に関連付けるこ

とは、特に下への方向を表す *herunter* を伴う例 (55) の場合は難しい。

- (55) Einen englischen Text liest er glatt *herunter*. (BW:527)
ある英語のテキストを彼は流ちょうに単調に朗読する。
- (56) Die Großmutter konnte viele Gedichte aus dem Kopf noch *hersagen*. (WdG:1784)
おばあさんは多くの詩をまだすらすらと暗唱することができた。

発話行為を表す *heraus* は、認識しがたい体内から認識しやすい外への領域へ向かう方向を指すという点で、*her* の第一の傾向〈話者への方向の関与〉を有する。〈発話行為〉は、音声として知覚される発話内容が体内から外へ空間移動する現象と受け取られがちであるが、実は発話内容は発話が行われる前の段階では純然たる思考内容である。厳密に言えば、発せられる音声もまた、体内にある場合と体外に出る場合とでは異なる響きを持つ。つまり、〈発話行為〉は音声・音響の空間移動 (例3) とは明らかに異なる現象である。〈発話行為〉の表現は、空間移動というより、むしろ発話行為を体内から体外へ向かう (向けられる) 音声の空間移動に例えた非空間的用法というべきであろう。

以上のように発言行為については *her(-)* が中心的であるが、目標の消極性が関与する場合のみ、*hin(-)* にも散見される。すでに2.2.2および3.2で述べたように、思慮なしの発言に *hin* が用いられる例は多数みられる。さらに例 (59) のように前置詞句 *vor sich* を伴い、非発信的な言動を表す場合もある。また *hinein* にも *ins Blaue hineinreden* 「口から出まかせを言う」という用法がある。これらの用法は発言行為にかかわる認識領域との関係よりもむしろ *hin* が持つ第四の傾向〈消極的な目標の関与〉が反映されたものと考えられる。

- (57) Das hat sie doch nur so *hingeklappert*. (BW:582)
それは彼女がただそんな風に考えなしにぺちゃくちゃしゃべっただけのことだ。
- (58) Ich glaube, sie hat das nur so *hingesagt*. (BW:583)
思うに彼女はただ考えなしにそういったのだろう。
- (59) Ich verstand nicht, was er vor sich *hingemurmelt* hatte. (BW:582)
私は彼が何を一人でつぶやいていたのか理解できなかった。

4. 考察とまとめ

3で取り上げた中間的事例に基づいて、ここでは空間的用法から非空間的用法にいたるプロセスを考察する。まず基本的な (字義通りの) 空間的方向を表す典型的な空間的用法を出発点に、典型的な非空間的用法を終点に設定することにする。

空間的用法の領域における空間的意味からの逸脱性と非空間的用法との関連性から考えるなら、まず両者が最も少ない用法は、限定された空間に由来する空間的用法として挙げた〈起床〉を表す *heraus* や〈衝突〉を表す *hinein* である (3.1.1)。それに対して、ある特定の行動パターン

を表す空間的用法として挙げた〈不意の到来〉を表す her(-) の用法は、到来の不意性と不快の念という点で様々な非空間的用法に関連する (3.1.2)。さらに動作の慣用的な方向を示す空間的用法として挙げた〈転倒〉を表す hin は、基本的な空間的意味には存在しない足下への方向を表すという点で、〈不意の到来〉を表す her(-) を凌駕しており、その移動に見られる目標の慣用性と消極性は、様々な非空間的用法に関連している。

〈所有の変化〉を表す用法のうち、物品の要求を表す her は、話者への方向という空間的要素を併せ持ち、空間的用法と非空間的用法のほぼ中間に位置すると見なされる。しかし非空間的要素である〈所有の変化〉は必須であり、また〈入荷・調達〉や〈支払い〉、〈返却〉などからわかるように、所有の変化を表す用法は、多くの場合、場面が限定され、さらなる非空間的要素が加わるため、むしろ非空間的用法と見なされる。

〈体内の出来事〉は、空間的用法の条件により非空間的用法と判断される。〈体内摂取〉や〈発言行為〉は、一見体内を空間移動すると思われがちだが、実は転義的に空間移動と見なされるに過ぎない。「飲み下す」といっても、本当に飲料が下へ向かっているのか、実のところ本人にもよくわからない。また〈発言行為〉に至っては、内から外への移動ではなく、思考内容から音声への変化である。ベクトルがとらえがたいという点で、〈体内の出来事〉は〈所有の変化〉を凌駕しており、典型的な非空間的用法により近い用法である。

以上、本論文で取り上げた中間的事例を、まず空間的用法を空間的意味からの逸脱性と非空間的用法との関連性から順序付け、さらに非空間的用法を空間的要素との関連性から順序づけることにより、次の空間的用法から非空間的用法に至る過程段階が成立する。

[空間的用法から非空間的用法への過程段階] (丸括弧内の数字は例文番号)

〈典型的な空間的用法〉(1) → 〈限定された空間に由来する空間的用法〉(13,16) →
 〈ある特定の行動パターンを表す空間的用法〉(17) →
 〈動作の慣用的な方向を示す空間的用法〉(23-32) → 〈所有の変化を表す用法〉(36-42) →
 〈体内での出来事を表す用法〉(43-59) → 〈典型的な非空間的用法〉(12)

この中間的事例の全段階を概観すると、典型的な非空間的用法に近づくにつれ、ある特性が強くなることに気が付く。それは、行動範囲が行為者の内的領域に近づいているということである。まず〈限定された空間に由来する用法〉に関わる空間は行為者の外にある周囲の状況であるが、〈ある特定の行動パターンを表す用法〉は行為者にとって話者への方向という外的な空間が関与する一方、行為者自身による行動パターンであることから、行為者にとっての内的要素は強い。〈動作の慣用的な方向を示す空間的用法〉では、関与する周囲の空間が行為者のごく身近に限られる。〈所有の変化を表す用法〉に見られる所有領域は行為者の領分である。〈体内での出来事〉の領域は正に行為者の体内で、最も内的な領域である。特に〈体外への放出〉

は内なるものの表出という点で、さらに内的性質が強い。

このように本論文で取り上げた中間的事例に基づく空間的用法から非空間的用法へのプロセスは、外界から人間の内面へ向かう。それはなぜだろうか。

それは〈体内での出来事〉を典型的な空間的用法と比較するとわかりやすい。例(1)のような典型的な空間的用法が表す移動は、通常外界に既存すると見なされる三次元空間で行われ、視覚をはじめ、聴覚、触覚等あらゆる知覚により明確にとらえることができる。それに対して、体内という空間は、本人以外にとっても、また当の本人にとっても認識困難な空間である。つまり体内は通常視覚ではとらえがたく、当の本人によって聴覚や味覚、触覚等を通じてかろうじて知覚されうる。こうした知覚から得られる情報は、典型的な空間移動に関する知覚情報に比べ遥かに不明瞭かつ不安定である。この認識しがたい体内での出来事をあえて明確にとらえようとするならば、想像と類推の力を借りなくてはならない。その手段の一つが、こうした出来事を空間移動に見たてるメタファーなのである。つまり体内は空間ではあるものの認識しがたいが故に、メタファーとなり、非空間的用法へとつながるのである。

以上、空間と非空間の中間的事例を検討することにより、空間的用法から非空間的用法への過程段階を提示し、さらにその要因を考察した。非空間的用法が空間の内的性質に関与することは、典型的な空間的用法が空間の外界性と強い関連があることを示唆している。ただしここで取り上げた一連の中間的事例に基づく過程段階は、慣用的な表現による一つのパターンであり、別な観点から見ればまた別の特徴をもつプロセスが存在することも十分に考えられる。この点については、今後の課題としてさらに検討を進めていきたい。

引用文献略号リスト

BW= Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden. Bd.3, hrsg. v. Krämer, Hilderad; Zimmermann, Harald, F. A. Brockhaus Wiesbaden Verlags – Anstalt, Stuttgart, 1981.

WdG= Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, hrsg. V. Ruth Klappenbach u. Wolfgang Steinitz Akademie-Verlag-Berlin, 1978.

主要参考文献

Brennenstuhl, Waltraud (1977) : The Primary and Secondary Directional Meaning of “herunter” in German, in: Linguistische Berichte 47, 28-54.

Bühler, Karl (1934/1982) : Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934).

Kant, Immanuel (1781,1787/1956) : Kritik der reinen Vernunft (= Philosophische Bibliothek Bd.37a), unveränderter Neudruck der von Raymond Schmidt besorgten Ausgabe (nach der 2. durchgesehenen Auflage von 1930) , Felix Meiner, Hamburg.

- Latzel, Sigbert (1979)** : Der Gebrauch von „hin“ und „her“ im heutigen Deutsch. Eine Vorstudie zu didaktischen Problemlösungen, Goethe-Institut, Arbeitsstelle für wissenschaftliche Didaktik, Projekt „Lehrschwierigkeiten im Fach „Deutsch als Fremdsprache““, München.
- McIntyre, Andrew (2001)** : German Double Particles as Preverbs. Morphology and Conceptual Semantics (= Studien zur deutschen Grammatik 61), Stauffenburg Verlag, Tübingen.
- 瀧田恵巳 (2006a)** : 「現代ドイツ語 her と hin の非空間的意味について – herauf/hinauf, herab/hinab, herunter/hinunter, herüber/hinüberに関する分析–」『言語文化研究』第32号, 大阪大学言語文化研究科, 5-26ページ。
- 瀧田恵巳 (2006b)** : 「現代ドイツ語 heraus, hinaus の非空間的用法における意味分類について – 文構造の見地から –」『言語文化共同研究プロジェクト2005: 言語における時空を巡ってIV』, 大阪大学言語文化研究科, 21-30ページ。
- 瀧田恵巳 (2007)** : 「内から外への方向表現による非空間的意味について – 現代ドイツ語 heraus/hinaus に関する分析 –」『言語文化研究』第33号, 大阪大学言語文化研究科, 57-80ページ。
- 瀧田恵巳 (2008a)** : 「入る方向表現による非空間的意味と内外関係について – 現代ドイツ語 herein/hinein の分析と試論 –」『言語文化研究』第34号, 大阪大学言語文化研究科, 19-39ページ。
- 瀧田恵巳 (2008b)** : 「コア図式による意味記述の一試論 – her と hin の空間的用法に関して –」『言語文化共同研究プロジェクト2007: 言語における時空を巡ってVI』, 大阪大学言語文化研究科, 21-30ページ。
- 瀧田恵巳 (2011)** : 「空間的用法の条件について」『言語文化共同研究プロジェクト2010: 言語における時空を巡ってIX』, 大阪大学大学院言語文化研究科, 31-40ページ。
- 田中茂範 (1997)** : 「空間表現の意味・機能」, 田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』研究社出版, 1-123,231-234ページ。

¹ この意味記述は本論文2.2.1に記載したLatzel (1979:4)をもとに, 引用文献のBWおよびWdG等を参照し, 「方向」という表現でまとめたものである。

² 本論文の「空間的用法の条件」は既に瀧田 (2006ab, 2007, 2008a, 2011) で取り上げたものである。「空間的用法の条件 (詳細)」は, 瀧田 (2011) の規定に基づく。その空間に関する記述は「先験的で外界において既存と見なされる知覚可能な (三次元空間)」であったが, 本論文の論旨に合わせ, 再度Kant (1956) を検討し, 実生活で言語を運用する観点から, さらに適宜修正を加えた。

³ 本論文の2.2は, 瀧田 (2008b) を本論文の主旨に合わせ適宜加筆修正した。

⁴ 3.4.1の用法の説明は, 瀧田 (2006a, 2008a) を本論文の主旨に合わせ適宜加筆修正した。

⁵ 日本語の指示詞にも同様の現象が見られる。例えば歯科医は患者の虫歯を指して「ここが痛みますか?」と尋ね, それに対して患者は「そこが痛みます」と答えることがある。この時純粋に距離の観点から考えれば, 患者の虫歯は当然歯科医より患者の方に近いので, 歯科医は「ここ」ではなく「そこ」で指し, 患者は「そこ」ではなく「ここ」と指すはずである。このように純粋な距離から考えられる指示詞とは全く逆の指示詞が選択される原因は, 患者の虫歯が, 患者にとって自分の体内という認識しがたく, 歯科医にとっては患者よりも認識しやすいことにある。この例からも, 体内は当の本人にとって認識しがたい, 心的に遠い領域であることがわかる。

⁶ 〈発言行為〉を表すherausに関する説明は, 瀧田 (2007) を適宜加筆修正した。